

百濟弥勒寺の縁起から見た伽藍構造と思想について

李 興 範

I. 問題の所在

百濟の大伽藍弥勒寺は創建当時の都は扶餘であるが、なぜ遠く離れた益山地域に半世紀をかけて国力を結集して巨大な伽藍を建立したか、または伽藍配置形態も高句麗、新羅、日本には見られない三塔三金堂の特異な伽藍配置形式を持っていることについて極めて疑問とする所である。筆者はこの問題について、弥勒寺伽藍創建縁起を究明して、弥勒經典思想と周辺の地理的状況を比較しながら、当時三国の政勢から百濟は扶餘から益山地域に遷都する計画があつて、その都としての機能が移行されたことを史料又は従来発掘された遺跡、遺物、寺院等から論考することが本論の目的である。

II. 伽藍配置形態と地理的状況

弥勒寺址は現在の行政区域上、全羅北道 益山市 金馬面 箕陽里 弥勒山の所在で、北面に約 430m の弥勒山（龍華山）を望み、その左右陵線間の平地に南向きに建てられており、伽藍中央部の中軸線上に南から中門・塔（木塔）・金堂・講堂が配置されて、中門の左右から回廊が派出し、講堂に接続する。また金堂と塔は再び回廊に囲まれている。そして、中央部の東・西にも金堂・塔（石塔）・中門が配置された一つの伽藍でありながら東・西・中央に単塔一金堂を併置した三院式伽藍配置で三塔三金堂式伽藍である。特に寺址は発掘調査結果¹⁾、元来は池の場所であったことから『三国遺事』の弥勒寺創建縁起の文献記録と一致していることは驚くべきことである。

III. 弥勒寺伽藍創建縁起

弥勒寺伽藍創建縁起について『三国遺事』卷二、紀異二、武王の條によると「一日、王與夫人、欲幸師子寺。至龍華山下大池邊、彌勒三尊出現池中、留駕致敬、夫人

謂王曰。須創大伽藍於此地。固所願也。王許之。詣知命所。問填池事。以神力一夜・山填池爲平地。乃法像彌勒三。會(尊)殿塔廊廡各三所創之。額曰彌勒寺(國史云王興寺)。眞平王遣百工助之。至今存其寺…」

と述べていて、武王(A. D. 600～641)と王后(新羅眞平王〈A. D. 579～632〉の公主)が龍華山に在る師子寺に行く途中池の中から弥勒三尊像が出現し、王后がそこに大伽藍を建てたいと発願し、王が許諾して法像、弥勒三會殿・塔・廊廡を建立して弥勒寺(A. D. 7C初)と命名したという。

IV. 弥勒經典から見た伽藍配置形態と周辺状況

武王と王后が行く予定であった龍華山にある師子寺は弥勒上生世界を表現していると思われる。『佛説觀弥勒菩薩上生兜率天經』²⁾によると

「…此人命終當生何處…此人從今十二年後命終。必得往生兜率陀天上…時兜率陀天七寶臺內摩尼殿上師子床座忽然化生。於蓮花上結跏趺坐…晝夜六時常說不退轉地法輪之行…」

とあって、弥勒菩薩は終命の後、兜率天に上生して七寶台内の摩尼殿上の師子座に結跏趺坐して昼夜六時間説法するという。兜率天は欲界六天中の四天に該当し、弥勒上生世界を表現している。この内容から考えると『三国遺事』の「師子寺」は兜率天の「師子座」を象徴していると思われる。

縁起から判断すると、師子寺は弥勒寺創建以前からあったことを知ることができる。百済は三国の中でも最も戒律主義を厳守した国であった。聖王治世4年(A. D. 526)に謙益が印度に行って戒律を学んで帰国し律部七十二卷翻訳した。法王時代には禁殺條が行われ、百済は武王以前から律令制度が確立された。その中で戒律主義的の佛教から貴族層中心的な弥勒上生信仰が流行し、師子寺が造営されたと思われる。さらに武王が師子寺に行く途中池の中から「弥勒三尊像」が出現したことは、『佛説弥勒大成佛經』³⁾によると、

「時穰佉王。與八萬四千大臣恭敬圍繞。及四天王送轉輪王。至花林園龍花樹下。詣彌勒佛求索出家。爲佛作禮。未舉頭頃鬚髮自落袈裟著身。便成沙門…」

又は、『弥勒下生經』⁴⁾に、

「…爾時彌勒初會八萬四千人得阿羅漢。是時蠶王。聞彌勒已成佛道。便往至佛所欲得聞法…」のように、轉輪聖王が弥勒菩薩の龍華樹下成佛の消息を聞いてその場所に行って會ったことは、武王が龍華山下の大池で弥勒三尊に會ったことと同様と思われる。弥勒下生時の閻浮提の王が轉輪聖王のように、百済に弥勒下生世界が実現する時期の王が武王自身のことを暗示している。そのことから考えると武王自身がその

時代の転輪聖王として弱体化した王権を回復して、強力な統治権を行使するためにそのような縁起を作成したと筆者は推論する。『佛説弥勒下生成佛經』⁵⁾によると「…彌勒菩薩觀世五欲致患甚多衆生沈沒在大生死甚可憐愍…修無常想出家學道。坐於龍華菩提樹下…即以出家日得阿耨多羅三藐三菩提…」

と記すように、縁起の池の中から弥勒三尊佛が出現したことは、弥勒菩薩が閻浮提（人間世界）に下生して龍華樹下で成佛することを意味するし、池（弥勒寺址）の北向にある「龍華山」は經典の「龍華樹」を象徴すると思われる。

三塔三金堂式の特異な弥勒寺伽藍配置については、『弥勒下生成佛經』⁶⁾によると、「爾時彌勒佛於華林園…大衆滿中。初會說法。九十六億人得阿羅漢。第二大會說法。九十四億人得阿羅漢。第三大會說法。九十二億人得阿羅漢…」

と述べるように、弥勒寺伽藍構造は、龍華樹下で成佛した弥勒佛が「三會說法」をする三つの場所を意味している。創建縁起の「弥勒三尊佛」の出現についてその形態は二つの解釈が可能である。脇侍菩薩を伴う弥勒三尊佛か、あるいは三体の弥勒佛を意味することになるが、ここでは伽藍構造形態から見ると後者であろう。三金堂に安置された弥勒三尊は、中央院の金堂の本尊を弥勒佛として東・西院も兜率天に住する菩薩ではなく、龍華樹下で成道した弥勒佛を意味している。百済時代の伽藍配置形態は北魏時代の佛教の影響によって、洛陽永寧寺式のように南北の中軸線上に中門・塔・金堂・講堂を配置される形態が主流を占めている。弥勒寺はその伽藍配置形態を三つ併置したことである。講堂については三つの伽藍が共有するために中央部伽藍の中軸線上の北方に巨大な講堂を建立した。

弥勒寺を建立した武王は都としての諸般要件を具備した益山地域に遷都（この論考については紙幅の制限のため割愛する）して、貴族中心の上生信仰から民衆中心の下生信仰への転換を企画、弥勒下生の浄土世界を具現して、国民総和による国力を伸張し王権を強化して、宿願の三国統一を達成するために強力な統治権を駆使したことを推測することが可能であろう。

1) 『弥勒寺』遺蹟発掘調査報告書Ⅰ, 文化財管理局文化財研究所, 1989. 2) 『佛説觀弥勒菩薩上生兜率天經』大正蔵 14, 418c ~ 420a. 劉宋沮渠京声訳. 3) 『佛説弥勒大成佛經』大正蔵 14, 431b. 姚秦鳩摩羅什訳. 4) 『佛説弥勒下生經』大正蔵 14, 422a, 西晋竺法護訳. 5) 『佛説弥勒下生成佛經』大正蔵 14, 423c ~ 424b. 後秦鳩摩羅什訳. 6) 同上, 425a-b.

(キーワード) 韓国佛教, 弥勒寺, 伽藍配置